

一般口演 | 1-16 肺循環・肺高血圧・呼吸器疾患

一般口演-18

肺高血圧・一般

座長:

土井 庄三郎 (東京医科歯科大学大学院)

松永 保 (戸田中央総合病院)

Fri. Jul 17, 2015 4:10 PM - 5:00 PM 第5会場 (1F アポロン A)

II-O-21~II-O-25

所属正式名称: 土井庄三郎(東京医科歯科大学大学院 小児・周産期地域医療学)、松永保(戸田中央総合病院 小児科)

[II-O-24]先天性横隔膜ヘルニアの遠隔期肺高血圧～胎児肺容積は予測因子となりうるか～

○深澤 佳絵¹, 早野 聡¹, 沼口 敦², 岸本 泰明³, 伊藤 美春⁴, 齊藤 明子⁴, 佐藤 義朗⁴, 早川 昌弘⁴, 津田 弘之⁵, 小谷 友美⁵, 加藤 太一¹ (1.名古屋大学大学院医学系研究科 小児科学, 2.名古屋大学医学部附属病院 救急・内科系集中治療部, 3.豊田厚生病院 小児科, 4.名古屋大学医学部附属病院 周産母子センター, 5.名古屋大学大学院医学系研究科 産婦人科学)

Keywords:先天性横隔膜ヘルニア, 肺高血圧, 予後

【背景】先天性横隔膜ヘルニア(CDH)では肺高血圧(PH)がしばしば合併し、生後1か月での重症 PHは生命予後と関連する。急性期の PH治療が予後を改善したと報告されており、早期に適切な治療を行うことで更なる予後改善が期待される。生命予後の予測因子として胎児エコーの Lung to Head Ratio(LHR)、胎児 MRIの胎児肺容積が報告されているが、PH予測に関する文献は少ない。

【目的】CHDにおける遠隔期 PHの予測因子として、胎児肺容積の指標である observed/expected Fetal right lung volume(o/eFRLV)と LHRの有用性について検討すること。

【方法】2006年1月～2014年12月に、出生前診断され当院で治療を行った左横隔膜ヘルニア(LCDH)58例に対し、診療録より胎児期と出生後の臨床情報を後方視的に調査し、o/eFRLV及び LHRと生後1か月の PHとの関連について検討した。PHは肺動脈圧/体動脈圧 $\geq 2/3$ と定義し、心臓超音波検査より得られた三尖弁閉鎖不全、動脈管の血流速度、心室中隔の形態から判定した。

【結果】LCDH 58例のうち、早期死亡7例、データ不十分7例、染色体異常6例(重複あり)を除いた40例で解析を行った。生後1か月で PHありと判定されたのは12例、PHなしが28例、両群間で o/eFRLV、LHR、NO使用・投与期間、人工呼吸器期間、酸素投与期間、手術日、術式、肝脱出に有意差($p < 0.05$)を認めず。ROC解析による PH予測は、o/eFRLVで AUC0.900、LHRで AUC0.903と同等であった。また、Cutoff値をそれぞれ0.426(感度88.0%、特異度91.7%)、1.37(感度84.0%、特異度91.7%)とし、Cutoff値未満の PH High risk群、それ以外の PH Low risk群で、生後3か月時の PH治療について解析を行った。o/eFRLV、LHRともに PH high risk群で PH治療ありの頻度が有意に高く($p < 0.01$)、Low risk群では生後3か月時点で PH治療を受けている症例はなかった。

【結論】胎児肺容積の指標である o/eFRLVと LHRは、LCDHにおける遠隔期肺高血圧の予測に有用であった。